

図師村甲ヶ原開発に賛成した上図師・弁四郎とその家族

第2回 新開畑開発と弁四郎

かぶとかはら
◆甲ヶ原開発計画



〔出典〕「御三絵入交絵図」 (図師町・佐藤家文書2677 町田デジタルミュージアム所収)

弁四郎が村落運営に関わっていた時期、図師村では村の西側にある秣場、下小山田村や根岸村、山崎村との村境に接する甲ヶ原（絵図左下）の開発計画が持ち上がります。開発許可を求める動きは、弘化3（1846）年5月ころから、開発発起人である上図師の五兵衛・糸蔵、下図師の徳兵衛を中心に始まります【表】。

【表】 甲ヶ原開発発起人一覧

名前	字名	支配	役職	屋号/苗字	家業
与平次	上図師坂下	平岡家	組頭→名主	紀伊国屋	酒造・質屋ほか
糸蔵	上図師日影	平岡家	百姓代→小前	紙屋/河合	古鉄買、紙漉
五兵衛	上図師坂下	霊雲寺	小前	?/河合	荒物・升酒
甚右衛門	下図師馬欠	田中家	名主→小前	霜田堂/佐藤	
徳兵衛	下図師	田中家	組頭		
四郎左衛門	下図師	田中家	百姓代		
清七郎	下図師	田中家	小前		草履わらじ・居酒屋

* 安政4.3.「武蔵国多摩郡図師村差出明細帳」（図師町・佐藤家文書237）を中心に作成

彼らを中心に開発への賛同を求める会合が村内で開かれ、領主らに開発許可願を上申するため、同年8月21日に出府します（町田市史料集2-1・2『武蔵国多摩郡下図師村佐藤甚右衛門「晴雨日記」』一・二。以後『日記』一・二と略す）。この時、甚右衛門（下図馬欠住、田中家領名主）と先の開発発起人3名の他に数名が同行しており、そのなかの1人に弁四郎がいました。

この出府にかかった経費などを記した「日記帳」（図師町・佐藤家文書1998）には、弁四郎分の費用として、銀25匁が計上されています。『日記』一の弘化3年9月7日の記事には、帰村する甚右衛門に同行した村びとの1人として、弁四郎の名もみられます。

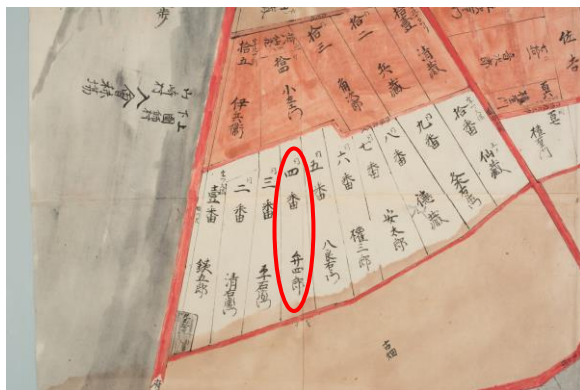
当初、これまで共同利用してきた秣場を耕地にすることで生じる肥料調達不足への懸念から、農業生産に悪影響をもたらすと考えた一部の村びとや領主らは開発に反対しました。しかし開発発起人と呼ばれる7名の村役人層や農間余業を営む者たちの説得により、大部分の村びとが賛同し、再

三にわたり領主へ開発許可を願い出ます。その結果、嘉永3(1850)年に幕府の検分が実施され、19町余の甲ヶ原の内、道や畦などの面積を差し引いた11町余の開発が許可されました。

嘉永4年2月、開発賛成派はこの開発予定地に対して、1反につき永30文を納めることを約束する請書を作成していますが、差出人のひとりに弁四郎がおり、その肩書は旗本平岡家領(上図師)の組頭でした(図師町・佐藤家文書751・752)。

開発地の割り当て分について、開発発起人には1軒につき3反が割り当てられ、その他の賛同者に対しては、1反5畝が割り当てられることが取り決められます。

年貢免除期間が明けた安政3(1856)年9月、代官江川太郎左衛門による検地がおこなわれました。その際に作成された「新開場御検地野帳」(当館「図師町・佐藤家文書」)には、弁四郎の名義で、「上見付畑四番 字一ノ久保壱反六歩」と記載されています。



「弁四郎が割り当てられた新開畑」
(出典) 「御代官江川太郎左衛門様御支配所新開素絵図」
(図師町・佐藤家文書2680)

割当地と割当人を示した「御代官江川太郎左衛門様御支配所新開素絵図」(図師町・佐藤家文書2680)にも弁四郎の割り当て場所が、具体的に記載されています。同年11月「新開場并残地秣場扱方議定帳」にも弁四郎の名と印鑑が押印されていますが、弁四郎は安政2年正月3日に病死しているため、実際の相続人は、弁四郎の家族と考えられます。

◆五兵衛との関係

この甲ヶ原開発を願う一連の動きのなかで、弁四郎は他の開発賛成派の村びととは異なり、開発発起人たちの活動を補佐する役割を担っていたことがわかります。その要因には、弁四郎の家が開発発起人のなかでも主導的な役割を担っていた五兵衛の家の分家であった点(『日記』二・65頁下)も大きく影響したと考えられます。

五兵衛は上図師の字坂下に居住し、村役人は勤めていませんでしたが、荒物や酒を扱う農間余業をしており、資金面で開発許可願いを支えた人物です。この新開願にかかった経費と出金者をまとめた「新開願雑用出金割合勘定帳」(図師町・佐藤家文書764)によると、五兵衛が出金した金27両2分と銭226文のうち、1両3分と銭764文が弁四郎ほか1名に支払われていることがわかります。

弁四郎は新開畑開発許可を求める動きに積極的に関わりましたが、開発に際して取り決められた議定内容に基づき、他の開発に賛同した村びとと同等の面積の割り当てしかありませんでした。

◆甚右衛門との関係

さらに他の開発発起人である甚右衛門との関係も、一因となっていたのではないかと考えられます。

甚右衛門は下図師馬欠に居住し、旗本田中家領の村役人を代々務めた家の人物です。図師町・佐藤家文書には、弁四郎が甚右衛門から借金をしていたことを示す嘉永4年12月付(①)と安政元年12月19日付(②)の証文が残っています。①では、年貢上納や生活資金にするため、7両2分を

借用しています（図師町・佐藤家文書981）。②では年貢上納に加え、病気による生活資金の不足を理由に5両の借金をしています（図師町・佐藤家文書1001）。

新開畑開発への取り組みや弁四郎家への経済的援助などによって形成された両者の関係は、弁四郎の死後も継続することになります。

【参考文献】

坂本達彦「幕末における新田開発と村役人——武蔵国多摩群下図師村を事例に——」
（町田市立自由民権資料館紀要『自由民権』24 2011年）